

続

徒然
つれづれ

人・企業・行政

桑野 巍

「読書の秋」といってもこのところ特段に意識したことはない。それでもと思って大阪の大きな本屋をのぞいてみることにした。店内は全国の本がすべて集められたのかと思えるような光景だ。本は書棚に立てられたり平積みされ、買い求めてくれる人を探しているようだ。出版不況というのに新刊本から雑誌類に至るまで何でも揃いそうだ。そして文房具、来年の手帳や日記の類も置いており賑やかだ。お客の数より書籍類の数の方が圧倒的に多いことにも気付いた。

大型本屋の社会見学はできたが結局何も買わずに本屋を後にした。何冊か手に取って見たものの「家の本棚にはまだ読んでいない本がかなりある」ことを思い出し、買求はこれらを読んでからでも遅くないと判断したからだ。それと自身が二年前に緑内障で右目を手術したこともあり、遅読派に属するようになったことを残念がったりもした。

帰宅してわが家の小さな本立てをのぞいた。この時見つかったのはもう一回目を通す価値があるかな、と思って抜き出したのが、「人に始まり人に終わる」(加藤義和著、昭和57年第一法規出版刊)だ。この新書版の副題は「行政と経営の理念を語る」で、全文135ページの小冊子だ。平易な文章で、人、企業、行政の三章から成り、著者の人生経験を素直に表現している。一般紙などで時折「書評」なる記事を目にするが、わが身に書評を綴るような才能はない。けれども30年ばかり前に書かれた著者の肌でとらえた実感表現には「さもありなん」という記述が随所にみられた。

「私の人生哲学は人がすべて」と語り、家庭の幸せ、企業の発展、社会の充実、国の繁栄、すべてが充実するも崩壊するも、それを構成する人間の心と行動によってなされるということである—と著者はおっしゃる。わが身に書評を綴る才能はないと前述したが、あえてこの本の再読感を“書評風”にまとめてみた。食品産業を創設し、経営しつつ自治体の首長を務めた著者のバイタリティーの根元は何なのか—という単純な疑問を持ちながら、その言葉のいくつかを紹介してみたくなった。

何だかんだ言っても今の時代(昭和50年代中ごろ)

は物質的に恵まれ過ぎている。しかし、それが幸せであるかどうかわからない。だから自律心、独立心の旺盛な人間は育ちにくいように思える。でも貧富の差は年々広がっているようではない。もっとも貧富の差というより「やる気」の違いかもわからない。豊かさが甘えに代わると逆に豊かさが削り取られてゆくとも思う。

「役所と企業の違い」の項では、企業は常にめまぐるしい環境の変化と激しい競争の中で生き残らなければならないという意識を常に抱いているが、行政の場合は入ってくる財源の配分ということで、競争もないし、絶対つぶれないという安心した点がある。そういう異なった中で育った企業の社員と行政の職員との「コスト意識」というものは、やはり大きな違いがある。

企業は自ら生きていくための財源は自らの努力の中で生み出していかなければならないが、役所はその年度予算の限られた財源の中で市民福祉の向上のために金をいかに配分していくか、ということを目的としている。そしてその財源は市民の納める税金と国からの地方交付税交付金によってまかなわれているために、自ら利益を上げなければならないという意識が必要ではなく、さらに同じ目的の役所が一つしかないために本来的に競争意識が湧いてこないのだ。

企業と役所との違いの一つに「公平」や「平等」という考え方がある。例えば企業では入社歴は浅くても努力して成果が上がれば相応の昇進もするし給与も上がる。努力している社員と仕事をしない社員とはすぐに差が出てくる。仕事を中心として評価する限り、待遇上の平等ということはある得ないのであり、差をつけることの方が公正なのである。またそうした評価機能があるために努力もする。役所は市民福祉を目的とし、公正や平等を鉄則とするため、自らの体質も公平、平等のムードがあり、職員に企業的な意欲、やる気が生まれ難い土壌になっている。当時の著者の考え方はいまでも通用する面があるように思えた。

(自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長)